

日本文化人類学会

2005.05.21 ~ 05.22

北海道大学

人間はどのようにして眠ってきたか 睡眠への文化人類学的接近 睡眠文化研究の視座

重田真義 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

本分科会・発表の目的は、睡眠文化研究という新しい研究分野の可能性を探ることにある。

これまで、人の行動としての睡眠は専ら科学研究の領域において、その神経・生理学的メカニズムを明らかにすることを主目的に研究されてきた。睡眠学の名の下におこなわれている研究は、医学・生理学分野の知見を結集して不眠症の克服や健康な眠りを実現することを目的としている。

一方、文化を扱う文化人類学の領域では、研究対象のほとんどすべてが覚醒時の人間の活動に焦点をあわせたものであった。睡眠行動に纏わる人の文化的事象とその多様性について、たとえば睡眠環境としての寝具や寝間着、寝る姿勢、眠る場所、身体技法としての眠り、眠りの儀礼、夢などは民族誌のなかで個別的に注目されることはあっても通文化的比較を可能とするような体系的な研究の対象とはほとんどなっていなかった。

このような状況の理解には、70年代に石毛直道らを中心に食品・栄養学など食の科学的研究と対置されてはじめられた食文化研究の事例がたいへん参考になる。食べ物の研究が形而下の現象を扱うものとして当初は蔑まれたのと同じく、昼はたらくために夜眠るという昼間中心の工業化社会の健康・労働観のもとで、夜の世界に華開く睡眠文化は、せいぜい日中の生産活動に影響をおよぼす社会経済的要因としてしかとりあげられてこなかった。このような視座を出発点として故吉田集而らによって開始された睡眠文化研究は未だその緒についたばかりである。

睡眠文化研究は、眠ることにまつわる文化の多様性を扱う。そして、睡眠という人間の基本的な欲求に基づく行動＝本能が、文化という後天的な要因とすりあわせられ、相互に浸透していく仕組みを解明する場として、睡眠文化研究の可能性をさぐっていきたいと考えている。

(キーワード：睡眠文化、睡眠行動、通文化的比較)